

「2012 冬保養プログラム・ほよ〜ん相談会」報告<番外編>
「福島を知るミニスタディツアー」

伊達市での相談会当日(12/2)早朝7時から、前泊した「うけいれ全国」の参加者を対象にした「福島を知るミニスタディツアー」が<NPO 法人りょうぜん里山がっこう>の関久雄さんの企画で実施されました。

「福島に暮らす者にとっては福島のことを知って欲しいという想いがあります。福島に来ていただいて、各地の受け入れプランを紹介していただくのはありがたいですが、同時に福島の実状を知って欲しい、それが受け入れの中身を高めるものにつながると考えます」というのが、関さんの思いです。

伊達市霊山町にある小国小学校の雨水口から $500 \mu\text{s/h}$ を超えるホットスポットが見つかったのはこの9月のこと。里山風景が広がるこの小国地区がミニツアーの実施場所でした。

柿の産地でもあるこの地域は、道の両側に柿畑が点在し、どの木もたわわに実を付けています。ところが、検査の結果今年も出荷停止になりました。柿の木は除染のために軒並み、木の皮が剥かれ、無惨な姿をさらしていました。

さらに車を走らせると、空き地や畑、川縁などに黒や青の大きな土嚢袋が2段、3段と積み上げられた仮置き場が次から次へと目に入ってきます。中には放射能に汚染された田畑の土や草木、廃棄物が詰まっているのです。青いビニールシートの上に砂利を敷き、その上に土嚢袋が積み上げられ、その上空には何とピンクのリボンをつけたロープが張られているのです。どうやら、放射性廃棄物の目印になっているようです。次の保管場所が決まらないまま、どんどんどんどん土嚢袋が増え、おぞましい光景が里山にこれからも広がっていくのでしょうか。



その土嚢袋には、重さが書いてあり、ほとんど2トン弱でした。また、線量も書いてあります。4.3 μs の文字を見つけた人が持ってきた線量計をかざすと何と同じ数値を示しました。

伊達市は除染に力を入れている自治体で、原子力規制委員会の田中俊一委員長がかつてここで除染を先導したそうです。この除染のために、市の予算と同じ240億

円を使っているそうです。

除染が終わった家があれば、まだこれからという家もあります。ホットスポットの見つかった小国小学校に今も子どもたちは通学しています。放射能との終わりのないたたかいをしながら、人々が生活している汚染地の実情を多少なりとも知ることのできた貴重なスタディツアーでした。

